



一貫コース通信

文化の日を間近に控え考えた事

我が国には16日の祝日が在るが、6月と12月になると祝日が無いと言うだけで溜息を漏らすのは、私だけではないのではないだろうか。普通の国民にとっては行政にでも関わらない限り、祝日は休日の1日に過ぎないのかも知れない。しかし、祝日と休日に違いがあるとすれば、それは祝日本来の意義に由来するのではなかろうか。その中でも私は11月3日の“文化の日”だけは他の祝日とは異なる思いで過ごして来た。何故なら、“文化”を真剣に考え、重く受け止めて来たからである。

昨今、世界に目を向けると争いが絶えないのに気付かされる。今に始まった事ではないのだが、目を凝らして見ると文化の違いを理由に国家間の対立が生じる一方で、同じ文化圏に属するからという論理で併合を正当化する等の動きが急速に強まった様に感じている。つまり、国家間の行動原理の合理的解釈に文化の乱用がロジックとして見え隠れするのだ。

ところで“文化の日”の制定は先の大戦の反省に在った事を忘れてはならない。この時分日本は大東亜共栄圏の大義を掲げ、植民地解放を名目にアジア諸国に進出して行った。

しかし、次第に本性を露わにする事で信頼が疑念に変わり、やがて当初とは真逆の立場に追いやられた。その実態がどのようなものであったかは、大戦後の裁判で犯罪者として断罪された事からも明らかで、実際、そう言う事をしたのだと思う。戦争は個人の意思に反した事を強いるし、異常な精神状態に陥り衝動で行動しまうのも、又、誰もが持つ人間の一面である。だから戦争は絶対に避けなければならない。戻るが、その非道を肯定たらしめ残虐な事を行った精神の飛躍の奥底に、相手に対する文化的優位の意識が拍車を掛けた事は否定出来ない。この反省に立って“文化の日”を設けた筈である。元々文化とは、その国の於かされている状況で進む速さや向きもマチマチなモノである。勿論、優劣など無い。残念な事に、当時この認識が持てなかった。

私は日がな一日、暇を見つけて本を手にする事が多い。ジャンルはマチマチだが、それでも書棚に歴史に関する書物が多いのは、歴史がその国の文化そのものだからかも知れない。又、自然科学史・社会科学史をはじめ…○○史に接する度に文化への認識が深まり、それらを生んだ国家や民族に対し自然に尊敬の念や憧憬が強まるのを感じている。

人類に与えられた想像力はあらゆる文化を創造して来た。その力は自分達の文化と比較する事で、模倣と更なる技術向上の意欲を醸成し、より高度なモノを創出した。例えば私達の言語も然りである。男言葉の漢字、女言葉のひらがな、漢字から派生したカタカナも、元を辿れば中国文化の輸入である。当時、唐や隋に官僚を派遣し、多額の砂金と引き換えに制度・書物を持ち帰ったと…、作家司馬遼太郎先生が書いている。話は飛躍するが、TVで聞くウクライナ語とロシア語の区別が私には全くつかない。それくらい、近しい言語なのかも知れないし、地理的にも線引きが難しい。また、半世紀前には政治的にも同一国家として文化を共有していたという歴史もある。極近年のウクライナの選択に対し、そうした繋がりを持つロシアとウクライナであればこそ、互いに尊重し信頼し合えるはずだと考えるのは、ごく自然で在り誰にでも理解できる事ではないか。